

---

# 暇だから、お題もらって小説書く。

暇 隣人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

暇だから、お題もらって小説書く。

### 【Nコード】

N4162Q

### 【作者名】

暇 隣人

### 【あらすじ】

即興短編置き場。はじめての方や、この小説の詳しいことが知りたい方は、「はじめに。」をお読みください。

## はじめに。

・この小説は、わたくしいとま暇隣人の即興力と独創性と文章力のさらなる進歩のために、読者のみなさまから自由にお題をもらって短編集を書く！と大雑把に説明するとそういうものです。

・「君にこのお題を授けてあげよう」という方や「べつ、別にあんたのためにお題あげるわけじゃないんだからねっ！」という方がおりましたら、この小説のコメント欄か、twitter（作者のID: aiso|know|as|m）へのリプライにて随時募集しておりますので、そちらからどうぞ。

・お題の内容に制約はないです（ただし、グロテスクなお題や卑猥なお題はご遠慮ください）。単語、一文字、一行、どんなものでも構いません！いつでも好きなときに教えていただければ、いつかきつと書かせていただきます。

・ただし、物語がどう転がるかは……不明ですぜ。「こんなことになるなんて思わなかった！」という方が出てきてしまったら誠に申し訳ない。こうならないために、吐き捨てる感覚でお題をいただければ幸いです（何

ではでは、どうぞお楽しみあれ。

## どっちがどっち？（前書き）

手始めに一作。ある友人からもらったお題を元に書いたものです。

お題の内容はあとがきにて。

作者の実力をはかるための参考程度にお読みください。ではどうぞ

どっちがどっち？

……うむ、難しい。

この二つの違いを見つけるのは、おそらくカタカナの「ソ」と「ン」を見分けるぐらい難しいだろう。いや、ひよっとすると、ひらがなの「へ」とカタカナの「へ」を見分けるぐらい難しいのかもしれない。

ここでちょっと新発見だったのが、「へ」はカタカナに直すと左の下がっている部分がちよこつとだけ短くなるようだ。これで今後この二つを見分けるといふようなとてつもなく無茶なことを言われても、答えられる自信ができた。あつたところで使い道もないが。

……さて、今私の目の前には、二つのどんぶりが置かれている。

片方は、近所のスーパーマーケットで売られていた「中華そば」なる、いわゆる棒ラーメンの一種。

そしてもう片方は、わざわざ通販のチラシを見て取り寄せた、「醤油ラーメン」という名の老舗のラーメンセット（本物がどうかは疑わしい）の入ったどんぶり。

この二つ、似ているようで、何かが違う。そのはずだ。

なぜなら、片方は「中華そば」であり、もう片方は「醤油ラーメン」だからである。他に理由などない。

……どうしたものか。

まあなんにせよ、食べ比べてみるしか方法はなさそうだ。

私が先に手をつけたのは、棒ラーメンの「中華そば」だった。れんげを手にとり、スープをすくって飲む。一番最初に飲むときには音を立てずに静かに飲む、というのが私のこだわりだったりする。

……うむ、美味い。

さすがは庶民の味といったところか。貧乏人たちの味覚を中途半端に捕らえる味の適度さが大変喜ばしい。もう一度すくって飲む。今度はすくらず、と啜って飲んだ。音が変わるうとも味は変わらない。つまり美味いということである。

肝心の麺はどうだろう。新品の割り箸を不器用に使い（普段は洋食を食べているから使い慣れていないのだ。お恥ずかしい）、麺を一本だけ掴んで口に入れる。もちろん、すぐに吸ったりなどしない。少しずつ少しずつ、口の中へと麺を入れていく。

……率直にいうと、固い。まだ麺がゆでできていなかったのだろうか。それとも、これ自体も一種の特徴であると考えた方がいいのだろうか。どちらでもいいか。

普通は、この上にちゃーしゅー（字が分からない……初耳だ）や、めんま（麺の……間？）といった具材を乗せるらしいと聞いていたのだが、あまりお金もなかったし詳細が知れなかったので諦めた。いたしかたない。

たつぷり三十分ほどかけて、私は「中華そば」を心の底まで堪能した。

ああ、これが至福のとき、というのだろうか？ スープのぬくもりはまるで聖母のまなざしのように私の心を癒してくれる。おお、神よ。今日もお恵みに感謝いたします。

祈祷もほどほどに、私は次に「醤油ラーメン」を食べることにした……のだが。

……麺が、でろでろになっている。

なんなんだこれは。まったく写真どりの出来ではない。そもそも、三十分前はこんな姿ではなかったはず。ではなぜ……？

ためしにスープを飲んでみようと思ったのだが、どんぶりの中にあふれるほど入っていたスープは知らぬ間にどこかへ姿を消してい

る。どこに逃げてしまったのか……。

仕方がないので、なにやら伸びに伸びている麺の一本を慎重に掴み、口に運ぶ。

もぐもぐ。もぐもぐ。

ごくん。

……うええつ。

なんだこの物体は……！　これが、あの「醤油ラーメン」だとい  
うのか？

私は怒鳴り散らしたい気分でいっぱいだった。「中華そば」と似  
ていると聞いていたものだから、私はまたさっきのような幸福、い  
やそれ以上の感慨を味わえるのではないかと期待していたのだ。そ  
れがまさか、こんな代物だったなんて……。

ん、待てよ……？

もしかして、これは冷えてしまったからおいしくない、のでは？

なるほど、それなら合点がいく。同時に二つとも作ってしまった  
わけだから、片方を食べている間にもう片方が冷めるのは至極当然  
のことだった。われながらなんという失態。

ということとは、解決方法は簡単だ。

チーン、である。

……電子レンジから姿を現したその物体は、さらにすごい形状へと変化していた……。

これを食べるといふのか……？ 我が神よ。

しかし、食べないわけにはいかない。私はこの二つの違いをなんとしてでも知りたいのだ。単純な好奇心は、ときに苦痛を超えることがある。ものは試し、ともいう。

私は、今度こそ恐る恐る、麺の一本を口の中に放りこんだ。

美味しい……だと……？

まさかの展開だ。よりにもよって、まさか「醤油ラーメン」がこ

んなに美味だなんて！

溶けるようにしなった麺は見た目こそ最悪なもの、いざ食べる  
とほどよい口どけ感が良い効果をもたらし、口内にじわじわと広が  
る感覚は癖になるほど心地いい。独特の和風の香りが、喉から鼻へ  
と伝わっていく。

これが……「醤油ラーメン」。

すばらしい……ああ、神よ。今度こそ、私は心の底から感謝いた  
します。あとさつきちよつと疑ってしまっでごめんなさい。ちよつ  
とした気の迷いです。すいませんでした。

脳内でいまだ至福のひと時を味わいながら、私は「醤油ラーメン」  
の残りをむさぼるように食すのだった……。

さて、それから何日か経って、私が友人とともに行ったラーメン  
店で大きな恥をかいたことは言うまでもないだろう。

いやはや、日本の文化は、実に奥深いものだなあ。

ところで、つい最近正月を迎えて、友人の家で「おそづに」  
(おぞましいうにの略、かと思っていたが、友人には大爆笑された)

を食した私は、また新たな疑問にさいなまれていた。

……「丸餅」と「角餅」、一体何が違うのだろう。

私は今日も、日本文化の奥深さをしみじみと感じている。

どっちがどっち？（後書き）

お題は、「中華そばと醤油ラーメン」。  
ありがとうございました。

ウンメイデンパ、受信しました (1) (前書き)

間を空けすぎました……即興力もなにもあつたもんじゃないですね、いかんいかん。

そこまでしといてなんなのですが、実はまだ完成しておりません。

(何

たぶん次回で終わると思いますが、とりあえず「上・下」のような形で公開しようと思います。

というわけで今回はその「上」にあたります。お題は(下)の最後にて。ではどうぞ

## ウンメイデンバ、受信しました (1)

「よう、少年」

「……その呼び方はやめてもらえませんか」

「なはは。そいつぁ無理な相談だねい、少年よ。少年を少年と呼ばずしてなんと呼ぶんだい？ ん？」

「いや普通に名前で……ああ、そういえば、まだ僕の名前教えてませんでしたっけ」

「おう、そーだね。そんな気もすらあな」

いつも通り、回らないんだか回していないんだかよく分からない滑舌で、天音<sup>あまね</sup>さんは到着したばかりの僕にそう言った。ふむ、そういえば、まだ僕の名前教えてなかったんだっけな。いまさらすぎて教える気もないけど。

重々しい荷物を、天音さんが持ってきた緑のビニールシートの上に一つずつ転がしていると、頭の頂上に一枚の花びらが乗ってきた。反射的に、空いた方の手で払い落とす。ひらひらと桃色の葉っぱが舞った。綺麗だ、とはちよっとだけ思う。

乱暴な格好で座ってビールを飲んでいる(目測で三杯程度)天音さんと向き合うように座ってから、僕たちは改めて挨拶を交わした。「んにゃ、おひさ。元気だったかい？ 少年よ」

「心配には及びませんよ。天音さんよりも規則的な生活してますから」

「にゃははー、言うねえ？ あんまり調子乗ってつと地球侵略すっぞ？」

「あはは、そんな馬鹿なー。あははー」

「マジだしー。天音つあんちょーマジだしー。あははー」  
「あははー」

……うーん。たぶん今、僕と天音さんは「花見」というやつをやろうとしてるのだろうけど。

なんか、流れとかそういうの、全然ないよね。

予想通りといえば、まさしくその通りではあるけれど。

まあ　　なんだかんだで、五年ぶりに見た天音さんは、やっぱり何も変わっていなかった。

最高に美人で、最高にデンパなままだったわけだ。

僕と天音さんの関係を端的に言うなら、恋人である。

ただし、決して一般的な「恋人」のレベルに収まるかというところというわけでもなくて　　特に天音さんの方は、自他ともに認める

歪み系女子（たった今作った造語）だったりする。

詳しいことは今は省こう。とにかく、天音さんは見た目の華麗さとは違ってかわってただの変人ということであり

「ういーん……がしっ」

「ぐえっ」

……突然首を掴まれた。喉仏が天音さんの指先でごりつて擦られて、思わず寒気がする。

「少年よ……。いつまで物思いにふけつとるんじゃい、ええ？ 天音つあんがっかりだぜ、久しぶりの邂逅でこれとかさ」

「ち、ちよこつと考えごとしてただけですよ……てかとりあえず、指はなしてもらえませんか？ そのままだと結構いったたたたたたたたたたちよちよちよ、めり込んでるめり込んでる！」

「まったく、少年の浮気者め。今度やったら船に連れ込んで実験台にするぞ。それでもえーのかい？」

「……出来たら遠慮したいですね」僕は船酔いする方なもんだから、もちろんだが、ビールにも酔う。ていうかまだ未成年だし。

「つくは」こらえきれなくなった時のように突然吹き出して、天音さんは手をはなしてくれた。耐えかねた咳がやっとの思いで出てくる。鳥肌はオールスタンディングオーバーションだった。つまり総立ち。

「んま、久々の少年君のもっちりお肌にも触れたことだから、許してやらいかね」

「……ありがとうございます」あんまり嬉しくないけど、会ってから五分程度しかたっていないはずだが、僕は改めて直感した。

この人、あぶねー。

もともと、僕と天音さんにはあまり深い関係はない、はずだった。僕はこれといって変な道を歩いてきたわけではないし（天音さんに失礼ではあるが、事実なので仕方ない）、なにより髪の毛を真っ赤に染めているような人との関わりを持ったことなんて一度としてなかったからだ。

じゃあ、どうして恋人同士なんて桃色な関係になってしまったのか、というところ。

話をするには、十年ぐらい前の春先までさかのぼることになる。

「怪しい人にはついていっちゃいけませんよ」

母はよく、その定型詩を僕が外に出るたびに言っていた。当時の僕もそのことについては重々承知していて、過去に二度ほどやってきた「お菓子あげるよおじさん」には二度とも拒絶の小槌をふるった経験がある（あの時の心底ショックそうな反応といい、もしかするとあのおじさんはただのいい人だったのかもしれない。今では確かめる術もないけど）。

住んでいた町内全体がそういう雰囲気をもっていたこともあって、不審者や犯罪者といった類の人は比較的少なかったといえよう。なんてことはない、たいそう綺麗で、平和な町だったのだ。

思えば、あの時点ですでに、僕と天音さんとの恋のハードルは上がり上がったのだなあ、と適当に感心してみる。正直、この状況自体は、二人にとっては大した障害にはなりえなかった。

ハードルが飛べないなら、くぐればいい。

壁が高いなら、ぶち抜けばいい。

天音さんは、どうやら生まれつきそういう人だったらしい。

「その少年。お宝、あげよっか？」

見慣れた通学路沿いの公園のベンチに、天音さんは長い足を組んで座っていた。このときの天音さんの髪はたしか……ええと、緑色でセミロング程度だった気がする。十年も前のことなので細かいところは曖昧だが。

とにかく不審者なのは明らかだったため、僕は天音さんを無視してすぐにその場を離れた。

逃げは、しなかった。はたして成功だったのか、失敗だったのか。……そのままいつものペースで歩いていると、後ろから誰かの気配がした。立ち止まって、うしろを振り向く。

ニヤニヤとした顔の天音さんが、僕を見下ろしていた。

「……なんですか？」

ああ、子供だったころの僕のなんと律儀なことか。不審者相手に「なんですか？」なんて言葉を吐ける度胸には自分のことながら感服せざるをえない。無鉄砲とも言うが。というかそっちの方がだいぶ有力だ。

「うふふ、お宝をあげよーかと言っとるんだぜ、少年よ」

天音さんは　これまた、たいそう不思議な話なのだが　今とまったく変わらない安定したプロポーシオンで、目の前の小学生を

相手に堂々と不審発言をしていた。近所の人が見たら間違いなく通報するレベルの非法なことまで生身でやり遂げていた。……うむ、最後はちよつと誇大表現かな。最近のファッションからすればへそを見せるなんて当たり前のことみたいだから。

まあとにかく、当時の僕は大変困った。なにしろ白昼堂々、犯人からの犯行声明を受けているようなものだったし、かといってこのままだとなんとというか、気まずい。

だから、とりあえず誘いにつてあげた。

「何をくれるんですか？」

「おお、食いつくねえ少年。若者はそうこなくっちゃあんの、くはははっ」

快活に笑いながら、天音さんは僕に背を向けてさっきの公園へと入っていく。僕はその光景をじつとその場で見つめていた。まったく、一歩も動かずに。

少ししてから、公園から天音さんが出てきて、僕のもとまで駆け寄ってきた。

「おいおい少年よ。ついてくるんじゃないかな？」

「怪しい人には、ついていっちゃいけないって言われてます」今にして思えば失礼極まりない。

僕の返事に天音さんは目を丸くしたが、すぐに元に戻って、僕の目の前でしゃがみこんだ。

「この天音つあんが、どうして怪しい人に見えるのかね？ ん？」

天使のように優しい口調で、天音さんは囁いてきた。……うあ、なんかすごい。鼓膜を揺らす天音さんのほどよく高い声は、頭の中にしつこく根付いたようだった。

「ほれ、さっさといっくぞ少年。我らがほんきよち、公園までれっ

つごうだべ」

ところどころ棒読みで話してから、天音さんは僕の手をとってぐいぐいと引っ張ってきた。

抵抗する気はそんなになかった。変なことだが、本当にそうだったのだから仕方がない。

たぶん、このときにはすでに僕は天音さんのことを、少しばかり意識してしまっていたのかもしれない。

ありえない話かもしれないが、案外間違いでもなさそうだった。

それから何があったのか、僕も正直なところは覚えていなかったりする。拍子抜けで申し訳ないが、だいたい記憶の通りだ。

とにかく、覚えているのは『天音さんは宇宙人だ』ということだけ。

……おや、なんだか意味不明という感じの反応みただけ。一応言っとくけど「ほんとのことだからのお」

僕の言葉を天音さん本人が代弁してくれた。けだるそうな仕草で、もう五杯目になるビール缶を掴む。おつまみなど皆無だ。僕がわざわざ作ってきた弁当なんて、まだ蓋すら開けていない。

花にも団子にも目がないというのは、ある意味珍しい気もしてき

た。

「……あの、天音さん」

「んいいい？ なんぞ？」

「これって、花見、なんですよね」

周りを見渡すと、僕らと同じ目的でここに訪れている人たちがたくさん見える。大人数で騒いだりはしゃいだり、陽気な気分がこちらまで流れてきているみたいだ。

反して、僕らはたった二人。……いや、人数はそんなに気にならないのだけど。

空気とか、もっとそういう何か、根本的に違う気がしていた。

「あー、そだな。花見だ花見。天音つぁんのことは気にせんぜ、とかく花を見るべし。な？」

「はあ……」会ったびに思うのだが、一体どの方言を使っているのだろう。本人に聞いたら「木星語じゃ」とか言いそうなのでやめておいた。

頭上の桜を見上げると、五、六枚の花びらが風に舞って飛んでいくのがわかった。細い枝は折れそうになりながら、自分を支えて、根を支えて、葉っぱを支えて耐えている。

会話もなく、相槌もなく。

天音さんが酔いでぶっ倒れたのは、それから何時間も後、夕方のことだった。

ウンメイデンパ、受信しました (1) (後書き)

はてさて、どうなることやら。

(下)にご期待ください。それではっ。

ウンメイデンパ、受信しました (2) (前書き)

お待たせしました、ようやく完成です！ いやあ、長かった。

…… ってそんなこと言ってられるもんでもないですが。次回はもっと早めに書きたいと思います。はい。

ではでは、お楽しみあれ。

## ウンメイデンパ、受信しました (2)

……はあ。

どうして、ここまで無理をする必要があるのだろう。

「そりゃー、しょーねんの膝枕がいとおしーからやないけー？」

「いや、呂律回ってませんから……」

ものすごく唐突に天音さんが倒れた後、近くで騒いでいた花見客の男性の一人が慌てて駆け寄ってくれた。さすがに僕一人では運べなかつたので（重いからじゃない。重いからじゃ……ない）、一緒に運んでほしいと頼んだところ、なんと家の目の前まで背負ってくれたのである。深々とお礼をしたら、さわやかな笑顔で「じゃ、俺はこれで」とだけ言って去っていった。やばいかっこいい。いやあ、いるところにはいるもんだなあ、優しい人。

……ま、天音さんならではのステータスがあるせいかもしれないけど。

改めて、天音さんの部屋の中を見渡してみる。

僕と天音さんが一緒に座っているソファは、以前この部屋を訪れたとき 出会って間もない頃だったから、たぶん十年ほど前のことになるが から、まったく変わっていない。しかも、それは配置だけという意味ではなく、見た目もそれほど汚れていなかったりするから驚きである。普段の天音さんからは考えられない様子だった。

目の前のテレビの横に並んだ黒い本棚の中には、大量の宇宙科学

系の本が詰まっている。広辞苑ぐらいはあるんじゃないかというほどの厚さのものから、大学ノート程度の薄さの本までいるんなものがそろっていた。片っ端から読んでいるのだろうか。たぶんそうなんだろう。

「しょーねん、さつきから何を見ておるのじゃ」

「いや……天音さんって、意外と勤勉なんだなあと思ってさ」

「なにを見とんじゃー！ 今は天音つぁんだけを見るやーい！」

「いたたたた耳はやめてお願いお願いほんとすいませんでしたまじで」

天音さんは僕の耳からぱつと手を放すと、むすつとした顔のまま僕の膝に頭を押し付けるように乗せている。……テレビもつけてないけど、暇じゃないのかな。あー耳が熱くなってる。

……それにしても、桜を見るやら自分を見るやら……。ころころ変わる人だよなあ、相変わらさず。

「ねえ、天音さん」

「おうつ？」

ちよつとだけ不機嫌な口調で天音さんは返事をした。あまり構わず、僕は続ける。

「天音さんは どうして、僕を好きになつたの？」

僕の問いに、天音さんはわざとらしくため息をついた。

「……それ聞ーちゃうのかい。ほんつと、しょーねんはすとれーとで真っ直ぐだのお」

「結構、本気で聞いてるんだけどな……僕」

口を尖らせた天音さんの横顔は、僕の膝の上に少しずつ下がっていく。僕も天音さんも、何も言わない。

しばらく静かになってから、ようやく天音さんは重い口を開いた。

「……十年前のこと。しょーねんは、まだ覚えとーら？」

「うん。僕と天音さんが、公園で会ったときの話だよね」

頭の中に、あのときの映像を思い浮かべる。天音さんの長い背丈の姿そのものは、今思い出してもあまり変わっていないように思えた。

「おう、そんなときさ。あんときはねー……ほんと、何を考えてたんだっつーか……自分でも、よーわからんけの」

「へえ？」

じつと目の前を見つめながら、天音さんは困ったような表情をする。白い化粧の流れた跡が、頬に一筋通っているのが見えた。

いつの間に、泣いていたんだろっ？

「うん、かたんに言っちゃまえばね　ウンメイ、探してたっとな。迷える少女、天音つぁんは」

「運命……」

「うむ、ウンメイ。あんときゃの天音つぁんあ、そりゃーそりゃーひどい有様だったけえの。……なんか、ほしかったんじゃ。ウンメイとかゲンソウとかカミサマとか　そーゆう、ずれずれにずれた何かの」

ずれずれにずれた……何か。

それはきつと　夢や理想や……そういつ、どこか遠い物のことなのだろう。

「天音つぁんはね、独りだったさね」

「え？　……独り？」

「うむ。だーれもおらんかった。天音つぁんは天涯孤独、唯我独尊……ん、あとののはなんかちげーわな、くははは」

痛んだ喉から出る笑い声は、がらがらに乾いている。大きく一度だけ咳き込んで、天音さんは横目に僕の顔を見上げた。

「あんときはね……探されたかったのだよ、ほんとーは。自分を見て、声をかけてくれる誰かがほしくてほしくて　の。そんなこつば夢見とつた。きつといつか来るんやないけー、なんて思いながら　にゃあ……」

「それはつまり 誰かに、見つけてもらいたかった……ってこと？」

「ん……そーとも言える。でもな、天音つぁんは『見つけれられる』前に、『見つけて』しもーたってこたあよ……それが、しよーねんだった、ってこっさ」

……なるほど。

それが、天音さんの『宇宙人』っていう意味か。

本棚に詰め込まれたばらばらの本の束を見ながら、天音さんに問いかける。

「ねえ、天音さん」

「……………」

「天音さんは……いつから、気づいてた？」

「……なにがじゃい、しよーねん」

「誤魔化さないでよ。天音さんらしくないな で、いつから？」

膝の上の天音さんの頭に、手のひらを優しく乗せた。

柔らかくて、暖かい。

「僕が『宇宙人』だったこと。一体、いつから気づいてたのさ？」

「……にやはっ」

僕の手を跳ね除けるようにして、天音さんは勢いをつけて起き上がる。上半身だけをねじらせて、潤んだ瞳と赤みを帯びる顔を僕に向けてきた。

十年前とは違う　天音さんの顔が、そこにはある。

「実はのお……最初ん頃からさ。しょーねんは、なんにも変わってないがらのお。そら、分かるさて」

「……おかしいな。成長速度はちゃんと調節してたはずなのに」

「天音つあんがいつとるのは、心のこったよ。体がどんなにでっかくなるーと、心は変わってねーからの。しょーねんは」

天音さんは、僕に少しずつ顔を近づけて　唇が触れ合う寸前で、ぴたっと動きを止めた。

にひっ、と。

天音さんは、無邪気に笑う。

僕もつられて、静かに笑みを返した。……ああ、なんていうか。

恥ずかしいんだよなあ　こういうのはさ。

こんなにまで、誰かと触れ合うことを愛するのは　せいぜい人類くらいのものなんだから。

十年前。僕の父は、仕事の関係で「地球」へと異動することになった。

「ほら、あれが見えるか？あの青い星だよ。あれがこれからみんなで行く、地球という星なんだ」

父と母は嬉しそうに、その星を宇宙船の窓から眺めていた。そんな光景を、僕はちよつとだけ距離を置いて眺めていたのを覚えている。

正直な話、僕にとって「地球」は言うほど価値のあるものではなかった。元々、他人だとかおもちゃだとか、そういうものにはまったく反応示さないような子供だったから、当然といえば当然のことだ。

だから僕は、「地球」での暮らしに感じるものは、ほとんど何も無かったと言っている。事前に作ってあった偽者の名札をぶら下げて、毎日毎日、まともに誰かと話もせず学校に通って。

気がつけば、僕は独りだった。

もしかすると、これこそが、僕が天音さんに強く惹かれた理由の一つだったのかもしれない。

僕も天音さんも、誰かを求めていた。

僕はそれに気づいていなかったけど、きっと、そうだった。

僕は天音さんに、自分の名前を教えなかった。……正確にいえば、教えられるはずがなかったのだけど。僕の名前は地球の言語とはそもそも違うから、伝えようがなかったのだ。

偽の名前を教えることは出来た。でも、それはなぜだかしたくなかった。

だから僕は、ずっと「少年」と呼ばれてきていたのだ。

天音さんとは、初めて出会って以来、毎日のように公園で会っていた。僕が公園の前を通りかかるといつもそこには天音さんがいて、僕に笑顔を向けながら片手で手招きするのだ。僕も微笑を返しながら、ベンチの真ん中を堂々と陣取る天音さんの横に座った。

特に何か決まったことをしていたわけじゃない。話したり、遊んだり、笑いあったり……日によってその内容は違ったし、すべてがすべていい思い出ばかりだったというわけでもない。それでも天音さんは毎日そこにいたし、僕も天音さんの誘いを断ることはなかった。

そういう関係だった。それから二年後の、あのときまでは。

「読書、慣れてなかったんじゃない？無理してあんなの調べなくたってよかったのに」

天音さんの持っている宇宙の本。あれはきつと、出来るだけ僕に近づこうとした天音さんの努力の塊なのだろう。

「んあ、まーの……んでも、いろいろ勉強になったさしや。それに……」  
「それに？」

「自分の彼氏が、この広い広い宇宙のどっかからきたんでな……  
って思うとつたら、なんやけ、誇らしいやないの」

照れくさそうに天音さんは笑う。その仕草がまた可愛らしかった。  
「ほんと、不思議だね。よくこんな奇跡が起こったもんだ。何があ  
るか分からないもんだよ、人生ってというのはさ」

「……かるがるしくキセキとかジンセイとかゆーでないぜ、しよー  
ねん」

軽くデコピンをされる。痛くはない。でも、たしかな温もりは伝  
わってきた。

天音さんは一度離していた顔をまた近づけて　そのまま、僕に  
覆いかぶさるように、前のめりに倒れる。

「今度のはの。天音つあん、きゅーしゅーに行くんじやて」  
「九州……か。随分、遠くなるね」

僕と天音さんが出会って二年目のことを思い出す。当時、ようや  
く体のいい仕事を見つけたことが出来た天音さんは　突如とし  
て、僕の前から姿を消した。僕が、「地球」へとやってきたときと、  
同じようにして。

次に会えたのは、それから三年後。今日と同じあの桜の木の下で、  
適当に花見をして……それからまた、天音さんはどこかへと行って  
しまった。

そして、今日。

長い月日を経て、ようやく僕らはまた出会えたのだ。

「きゅーしゅーはの、桜がよーよー綺麗だって聞いてーけな。写真  
とつたば今度見せやるわ」

「そっか……ありがと。僕、桜は大好きなんだ」

さっきまで見ていた、桃色の景色のことをふと思い出す。

桜は綺麗だ。春になれば、自然とそこに現れて　そして、気づ

いたときにはもう散っていく。

そう それはまるで、天音さんのようで。

毎年それを見るたびに、僕は天音さんのことを恋しく思うのだ。

「ずいぶんと待たせて、そしてまたどっか行って……ほんとにごめんの。しょーねんよ」

僕の憂いを含んだ表情に気づいたのか、天音さんは俯きながら謝ってきた。僕は慌ててフオーする。

「謝らないでよ、天音さんは何も悪くないじゃないか。それに……」  
目の前に迫る天音さんの額に、僕の額を軽くぶつける。泣きそう  
な天音さんの目が、少し驚きを示した。

「天音さんは、明るい方が似合ってる。そうでしょ？」

「……へへっ」

二人の顔が、どんどん近づく。

それはまるで、宇宙を回る小さな星のように ゆっくりと、ゆ  
っくりと。

軽く、そっと口元が触れ合った。

僕は笑う。天音さんも、笑う。

静寂は、心地いいぐらいに僕らを取り残す。

「またあおーぜ、しょーねん。いつになるか、分かりやせんけどの  
」

「いいよ。いつまででも、待ってあげる。だから、そのときまで…  
」

あなたの肌に、触れさせてください。

……それは一体、どっちの心だったのか。

僕の細い体を抱きしめる天音さんは、耳元で静かに、こつ囁いた。

「 ウンメイドンパ、受信しました」

了

ウンメイデンパ、受信しました (2) (後書き)

お題は、「宇宙人」「桜」「恋人」の三題噺。  
ありがとうございました。

**屋根の上で、賢者は語る（前書き）**

ずいぶん長い間お待たせしました。およそ五か月弱ぶりの更新となります、暇 隣人です。

いただいたお題はあとがきに記載してます。推理してみるのも面白いかもしれんです。

ただ、予想が外れて「理不尽だ!」と言われましても「ごめんなさい、僕もまさかこうなるなんて……」としか言えないので（爆）、まあほどほどにどうぞ。

それではお楽しみください。

屋根の上で、賢者は語る

なあ。

君はこんなこと、知ってるかい。

あの月は、ぼくらを見下ろしてるのだぜ。

あんなに高い高い空の上から、優雅に清閑に、淡々とぼくらを見下ろしてるのだぜ。

誰も届きやしない雲の上から、熱情と高揚と、狂気をぼくらに与え続けているのだぜ。

人間って、ちっぽけだよなあ。

ほんの少しだけでいい。月がちよっと動けば、きっと人間は滅んじゃうのだぜ。

さびしいよなあ。

君もそうは思わんかい。

どうなんだい。

部屋の窓から見る月は、綺麗かい。

コンパスで描いたみたいにな、真ん丸で滲んではいないのかい。

そりゃ結構。

ぼくもそっから見たりゃあよかつたな。

ぼくの小さい眼ん玉じゃあ、こんなに滲んで、荒んで、全然見えやしねえや。

こいつぁ誤算。

そりゃ結構。

なあ。

君はそこから出ないのかい。

いつもいつも、そんな清潔で整った部屋の中にいて、退屈はしないのかい。

文明つてもんはさ、退屈をどれぐらい潤してくれるんだい。

きつと、驚くほど鮮明に、現実のような幻想を見せてくれるのだろっな。

淋しくはないかい。

それとも、寂しいのかい。

ぼくには、たぶん一生、わかんねえな。

暗いところは苦手なのだけ。

いつかきつと、闇はぼくらを襲ってくるのだけ。

月が操っているんだ。

あの月はきつと、世界中の闇をみんなみんな操っているのさ。

そしていつか、じゅくじゅく煮込まれた闇のスープで、ぼくらを一気に溶かす気なのだけ。

難儀だなあ。

気づかずに死ぬなんてのは、綺麗かい。

月だって、きつとそう思ってるのだからろっな。

だからぼくらを、狂気で染めようとするのだけ。

狂気ってのは、無恥で無知なのだからな。

気づかないうちに、ぼくらは終わっているのだぜ。

淋しいかい。

それとも、寂しいかい。

ぼくは悲しいね。

月だって、涙を流しているんだ。

あの黒いシミから、ぼろぼろと涙を流しているんだ。

優しいねえ。

寂しいねえ。

どっちだって構わんの、だがね。

なあ。

君は死にたいなんて思ったこと、あるかい。

それはきつと、月のせいだぜ。

あの月は、謀らずして手に入れた闇たちを使って、君の喉元をしつかりと狙っているのだぜ。

君の手がいつの日か、喉をぐっと、握りつぶしてしまつことを期待しているのだぜ。

全部、月のせいだ。

黄色くて静かな、あの真ん丸の月のせいさ。

窓越しに見ても、わかるかい。

あいつはぼくらを見下ろしてるのだぜ。

ルナティックス、なんて歪んで笑うのだぜ。

かつこよくねえなあ。

正々堂々も、何もあつたもんじゃない。

あいつは狡猾なのだぜ。

誰も、あいつを止められやしないのだぜ。

だから、君のせいじゃない。

君のせいじゃないのさ。

なあ。

気づかずに死にたいかい。

それとも、気づかれずに死にたいのかい。

どっちだっていいけれどもね。

君は月に殺されたいと思うかい。

思わないだろうね。

抗いたくもなろうね。

でもきつと、そんなのは無駄なのだぜ。

月は昨日のぼくらを貪っているのだ。

屠って詰って弄って喰って罵っているのだ。

実験台だぜ。

過去のぼくらはもう、どこにもいないのだぜ。

君はどうして、月が大きくなるのか知ってるかい。

それはね、過去のぼくらを食べているからなのだけ。

ほんの少しだけ、太陽のカーテンから顔を出したが最後、昔のぼくらは止まったまま食べられてしまっのさ。

そして満腹になって、あんなにも真ん丸になるのさ。

そしてまた、闇にその影を埋めていくのさ。

怖いかい。

ぼくだって、怖いね。

破り捨ててしまいたいさ。

でもやっぱり、無駄なのだけ。

過去の無力なぼくらが、今までずっとそうだったように。

ぼくらもまた、あの月のシミの中に、抗うすべもなく吸いとられていつちまっのだけ。

淋しいかい。

ぼくは寂しいね。

そんなもんなのさ。

綺麗だろう、月。

窓、開けたらどうだい。

ここはそこより、涼しいぜ。

なあ。

いいかげん、その部屋を出ないかい。

怖いものは、もうどこにもないぜ。

ぜんぶぜんぶ、月が吸いとっていつちまったのだぜ。

だからもう、どこにもないぜ。

それはそれで、淋しいかい。

それはそれで、淋しいよなあ。

でもきつと、月はまだぼくらを殺さずに居てくれるぜ。

仮初の光だろうと、きつとぼくらを照らし続けてくれるのだぜ。

あの光は、昔のぼくらなのだ。

どうだい、そこから見えるかい。

ここからなら、そんな場所よりも、ずっとずっと、滲んで見えるのだぜ。

窓ごしじゃあ、あまりにも悲しくないかい。

鮮明でさ。

滑稽でさ。

見なきゃいいものだって、やっぱりあるんだぜ。

見なきゃいけないものは、ぜんぶぜんぶ月が吸いとってくれたのだぜ。

だから、そこから出ないかい。

赤いカーテンを開けて、

固く錆びた鍵を解いて、

張りついた棧を掴んで、

窓を開けてみないかい。

そこからはきつと、いい眺めなのだろうな。

うしじやましーいぜ。

月はまだ、君を見下ろしてくれているのだ。

寂しいかい。

寂しいよなあ。

だったら早く、そこから出ようぜ。

君を縛っているものは、闇でも月でもないのだ。

それはまぎれもなく、光そのものなのだぜ。

ぜんぶぜんぶ、月が吸いとってくれるさ。

あの黒いシミの中で、涙と一緒に洗ってくれるさ。

そうしてまた、ぼくらのもとへ、帰るのだ。

ルナティックス。

狂気なんて、所詮は記号なのだ。

扉の開け方、忘れたかい。

押すんじゃなくて、引くのだけ。

卒業、おめでとう。

君はもう、昨日の君には、戻れないのだけ。

ぜんぶぜんぶ、暖かくもない光と一緒に、月が吸いとってくれる  
のだから。

淋しいかい。

おや、寂しいのかい。

こいつぁ誤算。

そりゃ結構。

**屋根の上で、賢者は語る（後書き）**

お題は「卒業」。

ありがとうございました。

## 切れないロープと縁の跡（前書き）

四作目になります。どうも、暇 隣人です。

最近をよくお題ももらえるようになってきました……！嬉しい限りでございます。なむなむ。

さて、というわけで今作となりますが……ちょっとブルーになっちゃいました、すみません

そして相変わらずお題からずれてる感が半端じゃないです……。それでも良い！という方は、どうぞお読みくださいませ。

## 切れないロープと縁の跡

夏の重苦しい暑さは、私の小さな体を少しずつ締め付ける。気が付けば、外はもう夕方だった。

私は椅子の上に立って、開いた窓の向こう側を見ている。遠く遠く、オレンジ色をした太陽の光が、煌々と輝いているのが見える。

切ない。鎖の中の私の心を、乾いた憂いがゆっくりと潤す。風が吹く。細すぎる体は、耐えられずに静かに揺れる。つい最近まで伸ばしていた髪は、今や肩にも届かなくなっていた。前髪を指先ではらいながら、軽く深呼吸をする。

椅子が、ぎしっ、と揺れる。

汗が噴き出した。

体がひっぱられて、時間が止まる。

呼吸が苦しい。

.....

.....まだ、大丈夫よ。

大丈夫。まだ、大丈夫だから。

もう少し、だから。ね？　そうでしょ、私。

だからまだ、椅子から降りるわけにはいかないの。

壁にかかった時計を見る。二つの針は、五と十二。約束の時間まで、あと三十分もある。水でも飲みたかったけれど、椅子から降りるわけにはいかない。

ちよつとだけ、ほんのちよつとだけ気になって、スカートの中のポケッタの中から携帯電話を取り出す。少し前に買ったばかりの携帯。

あの人に勧められて、買ったばかりの携帯。

新しいメールは届いていなかった。受信フォルダをのぞく。最後の日付は、一週間前。これもいつも通りだった。

送信フォルダ。

今日の朝、送ったばかりのメールがある。

話があります

今日の夕方、五時半に、私の家に来てください

もうきつと、これで最後だと思います

来てください

待っています

携帯電話を閉じて、またスカートの中に直そうとした。……けれど、手が滑って間違えて床に落としてしまう。すぐに拾おうとしたけど、思い出して、やめた。

風が吹く。髪の毛だけが、ほんの少しだけ揺れる。

ああ、楽になりたい。

もう、椅子から降りてしまいたいよ。

でもまだ、駄目なんだ。

もう少し、待たなくちゃいけないんだ。

そうじゃないと、意味がないでしょう？  
ね、私。

信じてた。信じてたの。

きっと私たちは愛しあってるんだって、世界中の誰よりも幸せな  
んだって、そう思ってたの。

でも、そんなの全部、幻想だった。

私じゃダメだったんだ。私じゃ、あの人と一緒にいることはでき  
なかつたんだ。

告白した。

春の終わりに、私はあの人に告白した。

ちゃんと、受け取ってもらえるかな、って。

ふるまいだけなら、それこそ冷静さを装ってたけど、心の中はも  
うどうにかなっちゃいそうだった。

わかつてたんでしょ？

わかつてたから、あなたは拒絶したんだ。

全部わかつて、それでも私のことを拒絶したんだ。

そうなんでしょ？

ねえ、私ね、最近よくわからないんだ。

自分の気持ちとか、あなたの気持ちとか、なんにもわかんないん  
だ。

独りだけで、苦しんでるみたい。

馬鹿みたいじゃない？

ねえ、どうしたらいいんだろ。私、どうやってあなたと過ごした  
らいいんだろ？

教えてよ。

もう私、拒絶されたくないの。  
あなたの望む、最高の人になってみせるから。  
そうすればきっと、あなたも好きでいてくれるでしょう？  
そうすれば、きっと……。

風が吹く。

私の体は、もう揺れなかった。  
時計を見ると、もうすぐで五時半になるところだった。  
決意はもう、崩れなかった。

あの人があるんだ。あの人があるんだ。

もう私の胸の中は不安で不安でいっぱいだった。  
どうしよう。どんな顔をして会えばいいんだろう。どんな服着て  
きてくれるのかな。精一杯、おしゃれしてくれるのかな。

私、制服のままだけど、大丈夫かな。あの人ならきっと、これも  
かわいいって言うてくれるよね。ああどうしよう、なんて言おう。  
きっと、私のこと見たら、驚くよね。  
どうなんだろう。

もし、もう一回告白してみたら？  
そしたら、きっとあの人も。  
ね。

ああ、息が苦しいよ。

また会えるんだねまたあの人と会えるんだね。

うれしいうれしいうれしい。

どうしよう上手く呼吸ができないよどうしようねえどうしたらいい？

ああどうしたらいいんだろいつ椅子から降りたらいいんだろあの人に見られながら椅子から降りればきつとあの人も私のことを好きになってくれるかな綺麗だねって言うてくれるかなあ苦しいなあそつだといいなあ椅子から飛び降りる君はすごく綺麗だねって言うてくれるよねあなたなら言うてくれるよね言うてほしい言うてよお願いだから

お願いだから

ドアが叩かれる。

やった！

私は椅子から降りた。

今日はすごく忙しい日だった。ただでさえ家に帰ってこれるのは夜の十時台だというのに、電車は遅れるし塾は長引くしで、家についたころにはとうとう日付まで超えてしまっていた。

体中がだるい。明日は休みだし、とにかくさっさと寝ようと思う。お風呂にゆっくりと浸かってから、髪を丁寧に乾かす。部屋に戻るともう夜中の一時になろうとしていた。親は私を玄関で迎えてから、すぐに寝てしまった。家の中で起きてるのは、私だけ。

ベッドに倒れこんで、携帯電話を開いてメールを確認する。友達から五通ほど、「勉強教えて!」とか「明日遊べる?」とかいう内容のメールが届いていた。さすがに明日は家にいたいから、五通全部に「また今度ね」と送り返した。

自分では付き合いが悪いほうだと思うんだけど、なぜか友達は特にそういうことを言っていない。まあ、交友関係は広く浅く。私一人いなくて誰も困りはしないんだろう。そんなことを考えながら、携帯電話を閉じた。

……ん。

そういえば、もう一通だけ、誰かから届いてたような……。

いや、たぶん気のせい、かな。たまに迷惑メールみたいなのも来るから、その一種だろうと思う。

さあ、とにかく早く寝よう……毛布を被るのもそこそこに、目を閉じて眠りに沈む

電話が鳴った。

「えっ……？」

誰だろう、こんな時間に。

普段から電話なんてほとんどしないから、めったに鳴らない着信音に私はびっくりするばかりだった。

開いて、誰からの着信かを確認する。

「……？」

映った番号には、まったく見覚えがない。名前も表示されていないから、アドレス帳にも登録してないはず。

じゃあ、これ……誰？

「……なんか、気味悪い……」

どうしよう。このまま出ないでおこうか。

でも、着信音はずっとずっと鳴り続ける。

誰からだろう。もしかしたら、緊急の連絡とか、そういうのかも。そうだったら困るけど、でももし知らない人とかだったら……あ、そうか、間違い電話なのかもしれない。……でも……ううん……。

そうやって考えている間にも、電話は鳴り続ける。

……出たほうが、いいよね？

私は思い切って、受話器の絵が描かれたボタンを押す。

一呼吸おいて、耳に電話を当てる。

聞こえない。

雑音も、何も聞こえない。

汗が出てくる。嫌な汗だ。とにかく、不気味だった。

「……もしもし？」

向こう側の誰かに向かって、話しかける。

まだ、何も聞こえない。

「……………」

怖い。なぜだかわからないけど、とても怖くなってきた。夏なのに、とんでもなく寒さを感じる。なんでだろう。なんでだろう？

返事の来ないさびしさに、もう一度話しかけようとした、その時。

何かが、動いた。

……窓？

『

ねえ

』

声が、聞こえる。

ねえ、教えて？

私ね、よくわからないの。

どうしてあなたのこと、こんなに好きになっちゃったんだろう。

ねえ、どうしてかな？

それとも　これって、好きって感覚じゃ、ないのかな。

わからないんだ。今まで、こんな気持ちになったことなんて、ないんだ。すごく胸が切なくて、でも暖かいんだ。そわそわして、何も考えられないんだ。

ねえ、あなたは覚えてる？

独りぼっちだった私に、声をかけてくれたときのこと。

私ね、すごくうれしかったの。

あなたはいつだって人気者で、みんなから好かれてて。

私の、憧れの存在だったの。

そんな人が、まさか私に話しかけてくれるなんて、思いもしてなかった。私みたいな暗い人間に、話しかけてくれて、すごくうれしかったんだ。

ねえ、あなたはまだ覚えてる？　……やっぱり、忘れちゃったかな。

私の送ったメール、ちゃんと読んでくれたかな。

私の気持ち、伝わったのかな。

私ね、怖いんだ。

あなたの優しさを知ってしまったから。

あなたから離れるのが、怖くなっちゃったの。

私を救ってくれたのはあなた。ずっと独りで、虚しさしかなかった私の毎日に、光を差ししてくれたのは、あなただったの。

だからもう、離れたくないよ。

ねえ、私、どうしたらいいの？

もうわかんなくなっちゃったんだ。なんて言っていていいか、わからないの。

こんな気持ち、言葉になんて、変えられないの。

ねえ、これでよかったの？

私、あなたに見てもらいたかったのに。

私の気持ちを、私の本当の気持ちを、見てもらいたかったのに…

…。

なのにあなたは、来てくれなかった。

どうして？

ねえ、教えて。

言葉に変えられないこの気持ちを……どうしたらいいのか、教えて？

ねえ。

……私もう、疲れちゃったよ。

ごめんね。あなただって、きっと疲れてるよね。ごめんね。

でももういいんだ。私のことなんて、もう。

ごめんね。本当にごめんね。

あなたのせいじゃないの。

私の、この名状しがたい気持ちが、勝手にやったことなの。

だから、あなたのせいじゃない。

ごめんね。

ごめんね。

ごめんね……。

おやすみなさい。

「……あなた、さん……？」

窓の向こう側には、首を吊った少女が、静かに立っていた。

切れないロープと縁の跡（後書き）

お題は「名状しがたい」。  
ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4162q/>

---

暇だから、お題もらって小説書く。

2011年10月8日13時52分発行